

神宮自然農園への訪問 ～対馬における人と自然の共生～

瀬尾 光宏

1. はじめに

2019年度の対馬アクションリサーチ合宿の1日目、養蜂等自然と共生する対馬の伝統的な暮らしと環境に配慮した農業を学ぶため、私たちは長崎県対馬市にある神宮自然農園を訪れた。そこで自然と共生し対馬の伝統的な暮らしをしている神宮正芳氏を訪問し、アスパラガス収穫、鶏しめなどの体験を行った。神宮氏は対馬の伝統的な暮らし（用法）を継承して実践している。今回体験した農業の様子や伺った話をもとに、神宮正芳氏の活動と神宮自然農園の様子についてまとめていきたい。

2. 神宮自然農園

神宮自然農園ではアスパラガスの収穫、鶏しめを体験した。今回ご協力頂いた神宮正芳氏は夫婦二人、農業一本で生計を立てている、対馬では数少ない専業農家である。赤牛の畜産、養鶏、稲作、蕎麦、アスパラガス等の栽培に加え、自宅の古民家を活かした農林漁家民泊も経営している。

① 神宮正芳氏の活動について

神宮正芳氏は、生活を支える食の基盤は環境であることから、環境に配慮した農業を取り入れつつ、地元の子どもたちや大学生・社会人等、様々な年代に対して地域の自然環境や生き物との共生の重要性や多面的機能を発揮できる農業を熱心に、受け入れ指導（対馬野生動物保護センター主催夏期実習生の指導、農林水産省若手キャリア職員研修の受け入れ等）を行い、自然と共生する暮らしができる次世代の人材育成に取り組んでいる。2006年8月には総合研究大学院大学の対馬巡検で訪れた秋篠宮殿下御一行の対馬地鶏や蜂洞の採蜜、木庭作見学などのフィールドワークを受け入れた。また、あえて人がしないことにチャレンジしており、対馬で初めて田んぼのオーナー制度を取り入れた。「学ぶ農家」として、フードクラスター、農畜連携やIPM（総合的病害虫管理）、GAP（農業生産工程管理）など、様々な取り組みに挑戦している。さらに、日本大学生物資源科学部糸長浩司研究室と連携し、対馬の伝統的焼き畑（「木庭作」）を通じ、里山の再生にも取り組んでいる。

② 神宮自然農園の様子

神宮自然農園では、赤牛の畜産、養鶏、養蜂、稲作、蕎麦、アスパラガスの栽培等が行われている。この農園の特徴は生態系サイクルを利用した農業である。生態系サイクルとは、生産者・消費者・分解者の三者が一つの流れで生態系を形成しているというものであ

る。稲作・蕎麦・アスパラガスが生産者としての役割を果たし、赤牛・養鶏・ヤマネコが消費者としての役割を果たし、赤牛・ヤマネコの糞が分解者としての役割を果たしている。また料理で使用しない鶏の部位はヤマネコの餌として与えている。このように生態系サイクルを利用し無駄がなく環境に配慮した農業が展開されている。

3. 考察

今回神宮自然農園を訪問して、農園内で形成されている生態系サイクルがもたらす環境への影響、自然環境や生き物との共生の重要性などを聞き取り調査して、これらのことを地域の未来を担う若者たちへ教育することは、持続可能な社会の実現のために必要であることが分かった。また、持続可能な社会の実現には次世代持続性が必要であり、若者の意見が必要不可欠である。しかし対馬では、高校進学や大学進学の際に対馬を出て、その後Uターンしないという状況が続いており、対馬での若者不足が課題であると感じた。

4. まとめ

普段私たちが生活している場所では体験することができない鶏しめや農作物収穫を体験し、それを自分たちで調理しいたいてみて初めて、多くの生き物の犠牲の上で自分たちは生きていると感じた。さらに、これまで他人事のように思っていた環境問題や無駄のない農業の大切さというものが今ではとても身近なものと感じた。また、近い将来社会の担い手となる若い世代が地域の自然環境や生き物との共生の重要性をあまり理解していない今の状態に危機感を感じている。若い世代に自然環境や生き物との共生の重要性を理解してもらいよりよい将来を作るために、自分は自然環境や生き物との共生の重要性を伝える努力をしなければならないし、日頃から環境に良い行動をとりたいと考えている。今回のアクションリサーチで得た経験を活かして環境教育やESD（持続可能な開発のための教育）に対して親身になって考え行動しなければならないと強く感じた。

【参考文献】

神宮自然農園ホームページ, <https://shingu.org/> (2019年10月15日アクセス)
エコファーマー 神宮正芳さん・教子さん, アクションリサーチ合宿1日目配布資料 2019

(せお・みつひろ 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)